

言語の有契性と恣意性をめぐる記号造形

—シナイ文字と手話言語—

とみなが あきこ
富永 晶子

京都大学大学院

break.run.out9@gmail.com

1. はじめに

近頃、新聞に「中国最古の文字発見か」という見出しの記事¹（2013年7月10日付）が掲載された。現在まで中国最古の文字は約3000年前の甲骨文字とされてきたが、新たに発見された文字は今から約5000年以上前のものとみられている。原初に人類が何らかの方法で文字を書き始めたとは、人類の歴史にとって非常に画期的なことだ。人と人とのコミュニケーションの手段として、話すことは書くことに比べてはるかに広範囲に用いられ、より長い歴史を有してきたことはいままでもない。しかし、それと同時に、人類の歴史において、書くことがいかに重要な位置を占めてきたかということも、また等しく見過ごされてはならない事実である。文字は保存可能なコミュニケーションの媒体であり、当代の社会や文化などの知的活動を具象的な方法で知ることに寄与してきた。

人間の「書く営み」は、単なる「文字」という方法のみで尽くされるわけではない。太古の絵(画)的の文字もまた言語学的 (linguistisch) な対象である文字言語である。本論では、人類の原初時代における文字は、絵画的に形造られるという意味において「造形性 (Bildhaftigkeit)」の言語であり、その写像的な観点において、現代の自然言語 (Natursprache) として認知される「手話言語 (Gebärdensprache/ Sign Language)」とさまざまな特性を共有するのではないかと提起したい。

原初の時代の文字言語とは、洞窟や岩山の側壁に描写された絵画が該当するが、本論においては、古代エジプトを含むメソポタミア世界における、己の意思、期待、おそらく感謝や崇拜、さらには権威を伝達しようとした碑や像に刻印された「絵文字 (Bilderschrift)」のことである。本節の出だしに絵文字と記したが、論が進むにつれ、ここで意図する絵文字は、ピクトグラム、イデオグラム、ヒエログリフ (象形文字) を内包しており「表意と表音」をめぐる総称的な意味で使用している。

人間は話すことや書くこと以外に、過去も現在も様々な表現手段、身振りや踊りといった象徴行為、音やリズム、衣装・装飾を使用しており、これらは2つの系統に分類できる。一つは性質上、その場限りで消え去りやすい形態である非保存グループであり、もう一つは、時間・空間を超えて永続する形態である保存グループである。前者は身振りが代表であり、絵文字が後者に当たる。絵文字は、表現、伝達の働きに加えて、保管して記録を半永続化することが可能である。事実、何千年前かのタブレットに刻まれた碑文や洞窟画が

発見されている。他方、身振りは、その場、その時点で直ちに意味を伝えることができるが、時間・空間を超えて意味を伝える文書の形態をとらない。すなわち、文化習慣の形をとって伝達される。祭りや儀式がその好例となる。絵文字表現と身振り表現の両者は、刺激し合いながら今日まで共存してきた。原初の時代の絵文字という意思の伝達手段が、身振り表現の影響を少なからず受けながら、長い年月を経てやがて話し言葉の体系的記述のために編み出された文字記号へと歴史的発展を遂げる。

書かれた表現体としての文字を世界的に見渡すと、ラテン文字が多数を占める。南北アメリカ、オセアニアや南アフリカ、そしてヨーロッパに至るまで非常に幅広い地域に広がる。ラテン文字はローマ字である。これは、ローマ帝国を築いたラテン民族に由来する。本論の主張の一翼を担うシナイ文字がラテン文字のルーツと唱えられている²。本論は、絵文字としてのシナイ文字と身振り言語としての手話を、アルファベットの造形性を基軸として、比較検証する。はじめに、ローマン・アルファベットの本来の起源といわれるシナイ文字を考察し、さらに、人類がおそらくその原初から行使していたと推察される身振り表現とその言語学的な発展形態である「手話」について論を進める。なお、本論の中核的な概念である「造形」は筆者独特の使い方をしており、それについては第3節で後述する。

2. 「絵文字」と「アルファベット」

2.1 「絵文字」

文字は元来、図形が言語の記号になったところに成立したものと考えられる。文字は絵に由来するという説がある。例えば、イグナス・ゲルブ (Ignace Gelb) は「すべての文字の根底には絵がある」と説いている³。書字が絵文字から象形文字そして子音文字へと発展していったと想定できるとすれば、その根底に絵が存在することが確認できるであろう。「絵文字」とは、ピクトグラム (Piktogramm/ pictograph) とほぼ同義に使われ、絵 (画) や図形的な記号を使用して、意味内容を伝える文字のことである。本論で述べる絵文字とは、洞窟や古墳で出土した壁画・岩絵から、彫像に刻まれた絵画的デザインも含む非常に広範な概念である。絵文字は意味するものの形状を使ってその意味概念を理解させる記号 (Zeichen/ sign) である。この記号は使用する民族や地域によって、その意味と記号形式が程度により「恣意的 (arbiträr)」に結びついている。つまり、絵文字とは、ある文化、ある社会共同体の産物という点でラングとレベルを同じくし、原初において、絵文字は歴史や時間、習慣を共有する文化圏や社会共同体を前提としなければ、意味と形態の間の「有契 (motiviert)」の関係が遠のくという文脈において「恣意」の性格を我々に印象付ける。

原始的な段階では、ありふれた自然物は世界の遠く離れた各地でも似通った方法で描かれている。つまり、模写された自然と絵文字の類似性が有契的に明確にあり、段階を経て曖昧になる。この過程は人類の表現一般においては自然に辿る生成プロセスであり、簡素化されていく中国大陸の漢字が然り、リアリズムから印象主義、さらに抽象的作品へ移り変わる絵画が然り、本稿の第3節以降の手話言語が然りである。

恣意と有契の歴史過程のせめぎ合いの中で、原初の絵文字体系の中にある有契的な形とはどのようなものであったのか。その手がかりは「表意文字 (Ideogramm/ ideograph)」の中に原初の姿 (Urform) を見ることにあると考えられる。表意文字とは、1字で意味や事物を示す文字であり、時として物体そのものや動作・行為、思想や性質を表す記号体である。絵文字、さらには古代エジプトを中心に展開したヒエログリフ (Hieroglyphe/ hieroglyph) がこの表意文字に属する。絵文字は、分析と抽象の過程を通じて発展するものである。というのも、エジプトの表意文字を例に挙げると「ミツバチ」という絵文字が「王」を意味することは知られている。ミツバチの確固たる組織力の生来的な本能に由来した概念である。本来はミツバチを表す絵文字の有契的記号形式から、王を意味する恣意的記号形式へ変わったのである。換言すると、絵文字の中から「ミツバチ」という絵自体の意味が捨象され、「王」という意味に転化した。このコンテキストにおいて、ミツバチが女王を頂点としてヒエラルキーをなすという象徴性は現代の我々にも把握可能である。例えば、車椅子に乗る人のピクトグラムが、車椅子を用いる身体障害者のみではなく、高齢の老人を含め、障害者一般にも当該事項（交通機関の座席や施設の補助器具など）が適用される象徴記号であるのと同じである。

ミツバチの表意的な絵文字の有契と恣意の相対関係が一層、観念的になる例は「星」であろう。「☆」の図形で表された「星」という絵文字が「神」の意味に転化する。天上に圧倒的に瞬く星は、生命を差配する神の象徴となる。このように、絵文字のミツバチから王へ、絵文字の星から神への発展的な抽象化は、有契と恣意の相対関係において、絵文字の持つ象徴的な原初性はあくまで維持されていることが現代の我々にも理解が及ぶのである。

絵画的な概念記号は時代の変遷と社会共同体の文化的発展に伴って、次第に抽象化して恣意性を増す。象形文字がおそらくこの意味での代表的な記号体であろう。象形文字とは読んで字のごとく、形を象った文字であり、太陽という要素を「☀」で表すなら、有契的性質が直接的に高い文字である。この形が一段と抽象化されて、「◎」という象形文字が生じる。その上、先述したミツバチや星の例のように、太陽の絵文字は太陽の直接的な有契概念だけではなく、「ひかり」や「輝き」、「昼間」の属性の意味を帯びるようになると、それは一層抽象化が進んだ表意文字となる。ここに、ヒエログリフ（象形文字）なる表意文字では無論あるものの、絵文字たる絵文字の拠ってきたべき直接的意味を弱め、一層恣意的な「表意の文字」へ変容するプロセスを認めることができる。

2.2 文字の原初性とアルファベット

2.2.1 シナイ文字

アルファベットは、一つの発展経路としてエジプト文字（ヒエログリフ）を源とし、シナイ文字、フェニキア文字へとつながる。象形文字の代表格はエジプトのヒエログリフである。ヒエログリフは、エジプトの神殿やピラミッド、王の像などに人や動物などの姿形を描いた文字であることから「聖刻文字」と学術的に翻訳される。実のところ、ヒエログリフと象形文字を同一視してはならないし、ましてやエジプトの象形文字をもって象形文

字全体に敷衍させることは危険である。漢字やインドのインダス文字、メソポタミアの楔形文字もまた象形文字の範疇に属し、ヒエログリフに分類されても間違いではない。しかし、本論はヒエログリフや象形文字の言語学的な厳密性を争うことを目的としていないので、差し当たり、「エジプトの聖刻文字であるヒエログリフ・象形文字」という表現を用いて論を進めることにする。この定義において、エジプトの象形文字から派生したのがシナイ文字であるとしていいだろう。本項では、シナイ文字とそのアルファベットの原初性について概観する。アルファベットとは、ABC 以下の文字記号を指すのではなく、一字一音の表音文字を組み合わせるにより生成される語の記号体系である⁴。表音文字はそれ単独では一つの音を表すしかない記号であり、ある一定の意味を表意した記号ではない。例えば/b/というドイツ語のアルファベット記号は [be:] という表音にすぎない。この記号には意味は含まれない。

シナイ文字は、エジプトとアラビアとの間のシナイ半島にある、トルコ石の女神ハトホル神殿が建つセラビト・エル＝ハデム (Serabit el-Khadem 奴隷の丘) 遺跡で発見された。神殿の他にそこには聖域、浴場、前廊、彫刻を施された柱などが作られていた。セラビト・エル＝ハデムという文明から隔絶された荒涼たる遺跡は、元は中王国第 12 王朝時代 (紀元前 1800 年頃) の初めにシナイ半島におけるハトホル女神の聖地として神殿が築かれ、新王国第 20 王朝時代 (紀元前 1100 年頃) まで利用され続けた場所である。銅やトルコ石の碎石場が付近にあり、古代エジプトでは宗教的にも国防的にも重要な要地であった。エジプトの支配者らは国境地にあるシナイ半島の秩序を保つ必要があったためである。また、そこで産出されるトルコ石をいつでも入手できる必要があった。エジプト人は、ここを自国への危険を緩和する緩衝地帯にするとともに、徴用した人間や奴隷にした西セム系労働者を働かせていた。

1905 年、「エジプト考古学の父」といわれたイギリスのフリンダース・ピートリ (Flinders Petrie) が、スフィンクス型の彫像に刻まれた初期的な文字を発見した。スフィンクスはセラビト・エル＝ハデムで発見されたものであり、第 18 王朝のハトシェプスト女王時代 (新王国第 18 王朝時代) のものと見られるため、紀元前 1500 年頃のものとする。スフィンクスの両面、前後の脚の間には同じような銘刻が見られ、「𐀀 (家)」「𐀁 (目)」「𐀂 (雄牛の頭)」や「×印」などが刻まれている。これらの文字記号は、明らかに古代エジプトのヒエログリフと類似したものであり、実際に借用して書かれた⁵。古代エジプト中王国時代 (紀元前 2000 年頃) にシナイ半島に暮らしていたセム系の人々もヒエログリフを導入した際に、自分達の流儀で文字を借用した。

セム語は、文字体系の特色として、子音優先の文字であり、母音が従属的である。子音が、語を構成する際の基台をなす。単語は意味を担っている子音の語根 (通常は 3 つ) から形成されており、母音 (起源においては a, i, u の 3 つ) と幾つかの子音は文法的働きを持つ。よく引かれる例は、セム語系のアラビア語の語根 ktb である。これは子音のみの表記であるが、次のように実際には読解することになる。kataba (彼は書いた)、kutiba (それは書かれた)、kattaba (彼は書かせた)、kitāba (書くこと)、kitāb (本)、kutubun (「本」

の複数)等⁶である。これらの単語は書くことと関係があると推察される。セム語系文字では母音が記されないので、読み手が前後のコンテキストから判断し、母音を推測して補いながら読む。というのも、母音は一つの子音から次の子音へわたって発音するとき必然的に生ずる音、あるいは子音を発音するときや子音の調音が終わる際に自然と付随する音として捉えられるからである。

ピートリにより発見されたスフィンクス像の文字解読に初めて成功したのは、発見後から10年後である。古代エジプト語文法の基礎を確立したイギリスの著名な学者アラン・ガーディナー (Alan Gardiner) は、碑文のシナイ文字を研究し、エジプトのヒエログリフの絵文字記号との相似を発見した。彼は碑文の絵文字記号のそれぞれを、ヒエログリフと同じ意味のセム語に翻訳した。つまり、例えば水を表すヒエログリフに、セム語で水を意味する *mēm* を割り当て、セム語の文字とそれを示すヒエログリフの関係性を考察した。

シナイ文字は原初のアルファベットであると位置づけるのが本項であるので、ここで、アルファベットについて軽く触れておかななくてはならないだろう。英語の *alphabet* の綴りは、ラテン語の *alphabetum* に由来する。これはギリシャ語のアルファベット A に相当する α (*alpha*) と B に相当する β (*bēta*) をそのまま続けて並べたものである。これをさらに遡れば、セム系言語であるフェニキア語の文字で、「雄牛」を意味する「アレフ (*aleph*)」と「家」を意味する「ベート (*bēt*)」が、「アルファ」と「ベータ」の語源である。

このように、西洋一般のアルファベットは古代ギリシャを經由して伝播されてきた。セム族の一派である東方のフェニキア人から古代ギリシャ人がアルファベットを採り入れたとされる。その後、古代の地中海文明がまさに全ヨーロッパ規模で西方へ進むに従い、アルファベットは原初の形態を洗練させ簡略した字形の転換を遂げながら、イタリア北部のエトルリア、その後、さらにヨーロッパ大陸の奥深くに浸透し、ローマ人のラテン・アルファベットの表音文字として広く知れ渡ることになる。

2.2.2 シナイ文字の解釈

ガーディナーは、シナイ文字に関する絵文字の部分的解釈を発表した⁷。彼はセラビト・エル＝ハデムで発見された一連の絵文字を観察した結果、特定の絵文字が繰り返されていることに気付いた。

原意	ヒエログリフ	シナイ発見の諸文字
牛		
家		
目		

図1 シナイ文字の一部⁸

図1において、ヒエログリフの形と発見時のシナイ文字を対照させると、そこに大なり小なりの異同が見られる。「牛」を原意とする、いわば初期シナイ文字は、ヒエログリフとの比較において目の小点の有無は違いとするほどの差異は小さいが、角の簡素な造形は、絵文字性が希薄な初歩段階に入ったといえるだろう。次の「家」を表すシナイ文字は、囲いの中の小点や囲い線の点線が注目されるが、それ以上に、家の建築構造が時代の生活変化を受けたのであろうか、「入口」や部屋割りが示唆されていることが重要に思われる。これはいわば、原初レベルにせよ記号化される文字をうかがわせる。例えば、囲いの小点は「住人」を暗喩する一種の象徴形であり、四角が単なる図形ではなく、人が住む空間、すなわち、家を表したのであろう。三つ目の「目」も、ヒエログリフの静止した図形の「目」から、動的な、つまり、視覚機能を表意する「目」を記号化したのかもしれない。目の変型 (Variante) による人の感情表出をもしかしたら目の個々の変型に託して象徴させたのかもしれない。

ここで、具体的な一つのシナイ文字のいわば「テキスト」を図2より事例解釈してみたい。まず、書字方向から始める。4つの絵文字としてのシナイ文字からなる縦状の左列はそれぞれ上から下へ書かれている。一方、右の2つのシナイ文字のテキストは横書きであるが、右上の5文字は左から右、右下の5文字は右から左の書字方向である。ただし、左の縦列の二例は、右の横列の最初にある絵文字²が欠落している。シナイ文字は書字方向が一定していない。右から左、左から右、垂直方向、水平方向のいずれの方向も認められる。書字方向に関しては、牛耕式 (boustrophedon writing) と呼ばれるものもある。最初の行を右から左に書けば、改行された次行は左から右というような一種の途切れない書字方向の形式であり、牛が畑を耕す際の歩き方にちなんで付けられた形式の名称である⁹。

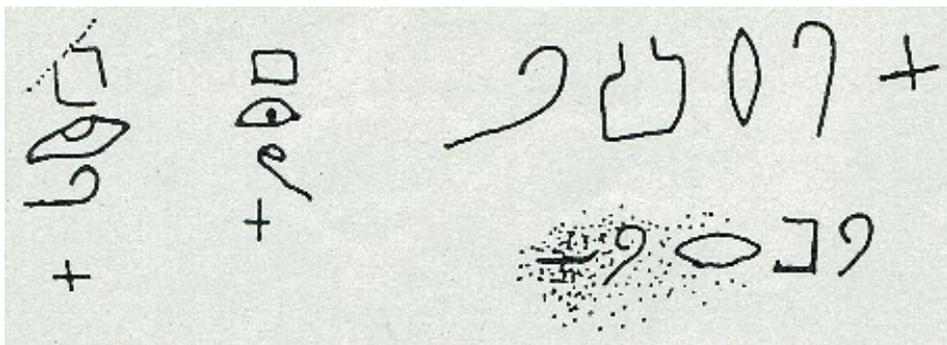
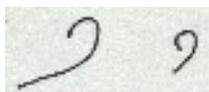


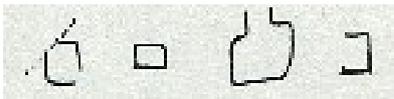
図2 同一に繰り返される絵文字群¹⁰

それでは図2のテキストを構成しているシナイ文字の個々を分析して、テキストの意味を探る。

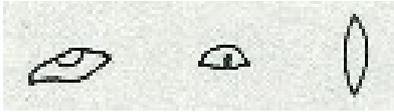
「(家畜を追う) 雄牛の突き棒」¹¹



シナイ文字に対応するセム語とギリシャ語の
ラテン・アルファベット表記は lamd と lambda



「家」

同様に表記は bayit (後に短縮されて bêt)¹²と beta

「目」

同様に表記は 'ayin と omicron



「動物の焼印などの十字標識」

同様に表記は taw と tau

各テキストはいずれも同じ意味を有するとみなされるので、図2の右列上段のテキストを取り上げる。図2の右列上のテキストを左から右に構成する絵文字(シナイ文字)に対応するセム語に読み替えると、*lamd-bet-'ayin-lamd-taw*となる。セム語ではしばしばアクロフォニー(acrophony 頭音)の原理が持ち出される。このアクロフォニーの原理とは、「頭韻書法」とも呼ばれ、単語の最初の子音だけを文字として使用するものである¹³。つまり、本来の絵文字の物体を表すのにセム語の単語を用い、その記号の音価として語の最初の文字を用いる。音価(phonetic value)とは、ある音韻に関して、その音声の実現、すなわち書き表される文字がどのような音声を表しているかを示す語である。換言すると、言語の過去の音韻を研究する場合、一つ一つの文字に該当すると認められる音声のことである。

したがって、各絵文字(シナイ文字)は対応するセム語 *lamd-bet-'ayin-lamd-taw* の頭音価 acrophonic value を有しているとガーディナーは考えた。一つ一つのシナイ文字は記号として、単語全体ではなく、語頭の音だけを表していると考えたのである。繰り返すが、各シナイ文字は描写された言葉を象徴するのではなく、それぞれの対応するセム語の最初の音だけを表す。したがって、個々のシナイ文字は個々の原初的な意味(例えば「家」や「目」)が捨象され、テキストは構成する個々のシナイ文字の頭音のみを用いて全体としての「意味」を割り出すことになる。ガーディナーは他の文字記号もヒエログリフ本来の音価を持つものとしてではなく、セム語として解釈することで、音価を推定していった。

アクロフォニーの原理を適用し、図2の右列上のテキストから、シナイ文字をセム語に読み替えその頭音価を並べると、*lamd* では *l*、*bet* では *b*、*'ayin* では声門閉鎖音、*taw* では *t* となり、テキストは「*lb't*」になる。重要な文法原理なので敢えて反復しておきたい。セム系言語は、母音が従属的で、子音が第一義的であるため、子音表記をするだけであり、母音の部分は読み補うことになる。最初の「*l*」は西セム語の「〜に」を表す前置詞であるため、テキストの「*lb't*」は「バアラトへ」という意味になる。バアラト *Baalath* (*ba'lāt*) は、旧約聖書に登場するシリア及びカナンの肥沃神バアル *Baal* の女性形に該当する女神である¹⁴。したがって、テキストは奉献文であることが明らかになる。ガーディナーが推測したように、図2のシナイ文字がハトホル女神の神殿の近辺で発掘されていたわけで、往時、

この地でファラオの命により、鉱坑でトルコ石が採掘されていた。エジプト人の監督の下、今日のイスラエル、シリア、レバノン、ないしヨルダン出身の西セム系の奴隷や労働者が使役され、そして彼らが遠方より故郷の神に思いを馳せつつ、シナイ文字の奉献文を叙したのである。

シナイ文字は、現在までの考古学的検証によれば、最も古いアルファベットの祖型である¹⁵。所謂シナイ・アルファベットは、シナイ文字が本源としたと考えられる古代エジプトのヒエログリフを転用し、これをアクロフォニーの原理で割り出した子音のみで組み立てたアルファベットであると解釈してさしつかえないであろう。

3. 手話言語の造形性

3.1 「有契的表意性」と「恣意的象徴性」

本節では原始時代のピクトグラム・絵文字やその流れをくむシナイ文字を「コミュニケーション」という視点から考える。ここでのコミュニケーションは、人間がある意図 (Intention) を持って第三者に、自己の意思を伝達する言語行為と広義に定義しておく。

人類は原初、西洋のアルファベットや東アジアの漢字やかな・カタカナ、これらの記号体系の源となる文字体系でもって、絵文字風に造形文語上でのコミュニケーションを行っていた。この意味で、第1節で提起した非保存媒体としての「身振り」は「動き」を体現化することにおいて「写像」と同じ線上にある身体記号である。「身振り」といえば、我々は一般にジェスチャーやパントマイムを思いつくが、身振りを言語として認識すればそれは手話言語となる¹⁶。

手話が身振りであると過小評価された時代はまだそれほど過去ではない前世紀の後半にまで遡る。聾者 (Gehörlose) のための大学ギャロデット (Gallaudet) のキャンパスで教鞭をとるウィリアム・ストーキー (William Stokoe) を端緒¹⁷として、1960年代に本格的に手話を人間の自然言語であるとする手話言語学が台頭するに従い、手話は身振りではないとされた¹⁸。その根拠説明を簡潔に行うために、ここでは執筆時の話題を単発的に取り上げる。2013年9月、ドイツの首相候補が中指を突き上げる身振りをして物議を醸した¹⁹。しかし、身振りは規範体系を備えておらず、時、場所、様態を越える普遍性に欠ける。首相候補の中指の身振りが、普遍的なコミュニケーションになりうるためには、中指の身振り言語の動作が、次なる身振り言語によって続行または相手方の応答でインタラクトしていかなくてはならない。しかし、そういうコミュニケーションの交流は身振り言語には欠如しているのである。

さて、エジプトのヒエログリフを源泉とするシナイ文字の絵文字的な造形性はフェニキア文字あるいはカナン文字に投影される。この過程において、前節で文字解析したように、造形記号の「有契 (motiviert)」から「恣意 (arbiträr)」への変遷が進む。絵文字記号のシナイ文字が原初のアルファベットであることはほぼ定説である。ラテン・アルファベットの記号体系は、完全にして独立的な「表音文字」であることにおいて恣意的記号体である。しかし、シナイ文字 (と後継のフェニキア文字) は有契と恣意の境を行き来する表音文字

である。というのも、シナイ文字がヒエログリフから展開した絵文字的特色を色濃く残しているためである。ラテン・アルファベットのAのもとになった牛の絵画的文字や、BやOやRのもとになった家と目と頭の絵画的文字、その他20個に満たないシナイ文字（フェニキア文字は22種類ほどあるという）は、有契を特性とする意味において本来は「表意文字」である。このような定義的な枠づけにおいて、シナイ文字の元々は有契的に描いた対象を表意する文字記号から出発して、時代推移と異民族への伝播のうちに、今日のラテン・アルファベットにおける恣意的としか思えない表音文字の礎を築いたのである。したがって、筆者がシナイ文字を原初の「表音文字」であるとするのは、シナイ文字の原初アルファベットの記号性質を踏まえた、ある意味で比喩的な概念であることを強調しておく。

シナイ文字の原初アルファベット (proto-sinaitisches Alphabet) が、有契的な表意文字から恣意的な表音文字に位置づけられるように、手話言語もまた、原初の有契的な表意記号の性格から始まったと仮定される。そして今日、自然言語であるがゆえに相当な比率で恣意の性質を持つ言語として、聾者の言語コミュニケーション媒体となっていると推察される。言語における有契性と恣意性をめぐり通底する造形形態を見極める試みが本論の目的となる。特に有契性の成立の有無によって、手話言語の仕組みの一端を垣間見ることができよう。

ラテン・アルファベットの言語記号が今日的には恣意的な表音文字であることから、これを「恣意的表音性」の概念で造語できるとき、シナイ文字と手話言語における同様に恣意的な造形は「恣意的象徴性」という類語で造語してよいであろう。これに対する有契的な表意性質を「有契的表意性」として対概念的に使用する。次項より、手話の記号造形における「有契的表意性」と「恣意的象徴性」を具象的に考察する。その際に日独米の手話を比較する。

3.2 日独米の手話記号の造形 —原基と手型パラメーターの基軸—

シナイ文字と相似の言語性格を見る筆者が意図するところの主張は、「有契的表意性」と「恣意的象徴性」をめぐる手話記号の造形性 (Bildhaftigkeit) である。手話は手指動作による「造形言語 (bildhafte Sprache)¹⁹⁾」である。手話言語学は、学問の歴史が若く、日本では高等機関等の組織的な研究はここ30年であるから、手話言語学の文法体系が絶対的に正しいとするのは尚早である。しかし、既存の文法を援用することは学術的に妥当であろう²⁰⁾。音声言語の音韻論における「音素」、つまり、意味の弁別をもたらす最小単位という概念を導入し、手話単語は4つの要素で構成される。要素は欧米では「パラメーター」²¹⁾という変換指数で表現されることが多い。

本論は、手話を日本とドイツとアメリカに求めるので、日独米の言語で4つのパラメーターを紹介する。「手型 (Handform/ handshape)」、「手型方向 (Handstellung/ palm orientation)」、「実行場所 (Ausführungsort/ location)」、「動き (Bewegung/ movement)」である。全パラメーターにより、手話語彙が図像化される。パラメーターを、紙幅の都合から1つの手話語彙を使って述べる。図3は日本手話の「赤」²²⁾である。

図3 [赤]²³

人差し指だけを伸ばした「ひ手型」の利き手が、口付近を「実行場所」にして、人差し指の先端を唇に接するほどに「手型方向」を定め、唇の端からもう一方の端へ「動き」を実行する。パラメーターの1つが欠ける、あるいは、1つを他のパラメーターに変えると非文法的であり、場合により違う手話語彙になる。([赤]の場合、[白]になる可能性がある。)

手話の造形記号において本論の目的を明確にするために一群の手話記号を対象とする。そのカテゴリーは「血縁のある家族」である。親、父、母、息子、娘等々である。「血縁のある家族」を対象にした理由は以下のとおりである。世界各国の手話は、時代とともに変遷してきた。手話の最初の造形と今日のそれとは似て非なるものも多くあるだろう。なるほど、自然界の産物は「血縁のある家族」以上に原形と相似するかもしれない。それは自然界を「模倣」する造形を好むからである。日独米の手話における、例えば「雨・果物・月」等は似ており、これは模倣する造形が異文化を超えて似通うのは自明の理であり、ここから手話語彙の原型の保持が推察される。シナイ文字がフェニキア文字とそれに続くラテン・アルファベットに変遷したプロセスと同様に、「血縁のある家族」は原始の社会共同体から今日に至るまで、原形を最低限に残像させながら捨象する歴史をたどってきたのではないかと考えられる。したがって、血縁に関わる造形は原形を他のカテゴリーよりも留めているのではないかと考えられるため、「血縁のある家族」のカテゴリーを採用した。

無論、日独米による相違が明解に表れるのは矛盾でも何でもない。血縁のある家族構成員のイメージをなぜに異文化・異民族の3カ国が同じくすることがあろう。日本人の母はドイツ人の母と違う血縁性を記号化する。日本人の息子はアメリカ人の息子と違う血縁性を手話に造形させる。しかし、それにもかかわらず、有契的表意性と恣意的象徴性の観念的な共通基盤を日独米の手話は有しているように思われる。

「血縁のある家族」のカテゴリーにおいて、その全てをくまなく列挙すれば相当数になるため、手話語彙は以下の11個とする²⁴。

[(両) 親] [父] [母] [祖父] [祖母] [息子] [娘] [兄] [弟] [姉] [妹]

「血縁のある家族」を用い、シナイ文字と同じくする有契的表意性と恣意的象徴性が成立

するには、手話造形において、パラメーター数の多寡は別としても、造形部分の特定パラメーターが共通していなくてはならない。11の語彙がばらばらのパラメーターで造形の全体が組み立てられるならば、それは本論の主張を無効にしかねない。本論は、相当な割合で通底する造形部分を「原基」と表現する。原基は手型パラメーターそのものである場合もあれば、手型パラメーターと協働する原基の場合もある。その意味で、原基は特に実行場所パラメーターと動きパラメーターに直接的に関わる。

日本手話の「血縁のある家族」から入る。11の手話記号は、特色ある有契的表意の原基と抽象化された恣意的象徴の手型パラメーターを出所とする。抽象化された手型パラメーターは、「男」を表意する親指の手型もしくは「女」を表意する小指の手型が11個のすべてを通底する部分造形を成す。図4から図7のとおりである。



図4 [父]

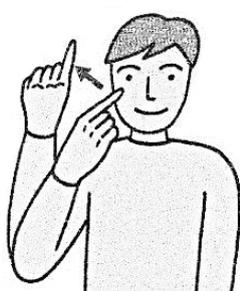


図5 [母]



図6 [息子]



図7 [姉]

ここでは、紙幅の制限で4つだけにとどめる。特色のある原基は「顔面への接触」である。先行して補うと、ドイツ手話（以下、公称のDGSとする²⁵）にもアメリカ手話（同様に公称のASLとする）にも共通する原基である。日本手話では頬にやさしく親指（図4の[父]の場合）か小指（図5の[母]の場合）で触れる行為は、「血のつながり＝血縁のある家族」の原初的な有契的表意を暗示させる。相似した動作が独米の手話にあることが推察をより説得的にする。

[男]・[女]の手型は、たくましい男性像と繊細な女性像を表意する日本民族独自の有契的表出であろう。日本手話は、[男]・[女]の手型が徹底しており、11個のみならず、「夫婦・家族」にも適用されるし、例えば、「職に就く」や「招く」ことの対象が男であれば親指手型で造形し、女であれば小指手型で造形する²⁶。日本手話は、造形にジェンダーが備わる点で音声言語のドイツ語と同じく性差の概念を有する。

独米に移る前に、シナイ文字、原初的アルファベット、手話の有契的表意性と恣意的象徴性をめぐるトライアングルな関係に関し具象的な解釈をしておく必要がある。絵文字を本源としたシナイ文字が、ラテン・アルファベットの表音文字の原初形態であり得たのと同じように、11個の「血縁のある家族」の手話語彙において、[男]・[女]の手型とその手型方向の両パラメーターや「顔面への接触」を担う実行場所と動きの両パラメーターは、あたかも「牛」の有契的表意を出自とするアルファベット A、「家」の有契的表意を

出自とするアルファベット B 等の恣意的表音文字と同じ単一的象徴記号の機能をする。すなわち、「顔面への接触」は、元は有契的に何かを表意していたのであるが、それが現在ではアルファベット A 等のような単なる表音文字的な恣意と化した。[父]・[母]における頬に手型の指が触れる造形はおそらく血縁のつながりと推測されるが、[息子]・[娘]の場合は、身体接触が腹部であり、この原基の造形は間違いなく、「お腹から生み出す」という有契的な表意であるに違いない。

同様に、[男]・[女]の手型パラメーターは、たくましさと繊細さという男女の気質を親指と小指の一本の指に託した有契的表意である。しかし、手話言語の言語たる理由に揺るぎはない。すなわち、[男]・[女]の手型パラメーターは、アルファベットの恣意的表音文字のように、同じく恣意的象徴の原基的な造形として他の語彙においても認められる。例えば、手話記号 [手伝う]・[相談]・[我慢] の中で [男] の手型パラメーター、[かわいい]・[かまわない] の中で [女] の手型パラメーターが全体造形の部分を担うのである。その恣意的な象徴機能に我々は、有契的表意を髣髴させる手話を見出すことができる。[かわいい] の女性らしさはいかに及ばず、[手伝う]・[相談] に男、つまり人の影を見るであろう。

3.2.1 「血縁のある家族」のカテゴリーにおける ASL の造形

「血縁のある家族」をカテゴリーとする限り、原基と手型パラメーターの基軸において、ASL は日本手話と DGS の中間に位置する。なお、この場で客観的な言語史的事実を提示しておかねばならない。なぜなら、本論が日本手話の他に DGS と ASL を選ぶ理由は無作為な選択では必ずしもなく、むしろある必然を主張できるからである。

ASL の対極にあるのが DGS といわれている。ASL はフランス手話を源泉とするが、現在の ASL は独自の手話を完成させ、今日では手話界のリーダー言語である。これには米国が手話言語学の最先進国であることが寄与している。一方、DGS は、母国ドイツ（歴史的には、19 世紀のプロイセンなどの諸邦）が聾者の手話を異端視したため手話後進国に甘んじた。ベッカー (1997) によれば²⁷、その分だけ手話の造形過程が近代的であるためか、音声言語のドイツ語に影響される人工的な造形が目立つ。この見解は「血縁のある家族」で取り上げる手話語彙に投影され、その結果、DGS が本論の主張に矛盾する要素が多いことを明らかにする。しかし、逆説的な言い方であるが、本論の主張との距離感の多様性を考察できるのが日独米の手話である。

ASL の 11 の語彙より、以下の図 8 から図 11 の 4 つを抽出する²⁸。

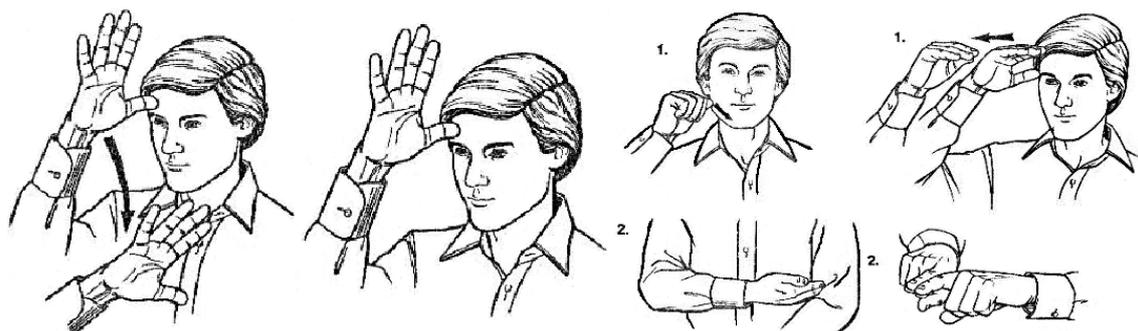
図8 MAN²⁹

図9 FATHER

図10 DAUGHTER

図11 BROTHER

ASLにおいても、「顔面への接触」が日本手話以上に11個すべてに認められる。それも、男性群 (FATHER/ SON/ BROTHER) は額、女性群 (MOTHER/ DAUGHTER/ SISTER) は顎ないし下頬に利き手の手型が触れることが特色である³⁰。この「血縁のある家族」の原基は有契的表意を造形しているが、それが何であるのか手話辞典にも説明がない。その意味ではASLも有契的表意から恣意的象徴のプロセスを踏襲しているといえる。

「血縁のある家族」の11手話は、手型パラメーターにおいては不統一である。不統一は、親指の「男」と小指の「女」の統一的手型を持つ日本手話と対比しており、造形的には日本手話よりも深い意味を持った有契的表意を示す4パラメーターから多彩に組み立てられる。特定の手型パラメーターに依存しないで、残る3パラメーターが調和的に連動する。まず、FATHER/ MOTHERは、MAN/ WOMANを手型パラメーターに据えることにおいて日本手話と軌を一にする。異なる点は、日本手話は、[男]・[女]の手型にプラスするパラメーター群が[父]・[母]を発展的に造形する。一方、ASLは、図8と図9のように、MAN/ WOMANの全パラメーターから動きと実行場所のパラメーターがマイナスされた手型と手型方向の静態したパラメーターだけでFATHER/ MOTHERが造形される。

MAN/ WOMAN/ FATHER/ MOTHERを等しく統べる原基は有契的表意と考えられるような造形であるが、現代人の感覚では恣意的象徴の典型である。辞典が示唆するところでは、原基はFINEを表意するらしい。FINEとは、単に「すばらしい」の意味ではなく、おそらく語源のフランス語 fin(e)の意味での「終わり・完成」であると考量される。これは「申し分がない」という人間的な完成度から手指することが大いにあり得るためである。したがってFINEという手話は「人として完成の域に達した」という意味が有契的表意と考えられる。しかし、FINEがそういう意味だからといって、5指を広げた「テ」手型の親指が、父では額、母では顎に触れる原基の表意的意義を解明してくれるわけではない。

SON/ DAUGHTERでは、BOYとGIRLの造形記号を基に微妙に変型された第1手指動作に「継起³¹」して、第2手指動作が行われる。それは、有契的表意を容易に推測させる。すなわち、SONもDAUGHTERも「抱っこする」造形動作をする。BROTHER/ SISTERにおいても、BOYとGIRLを基に簡素に変型させた第1手指動作に継起して第2手指動作が行われる。その第2手指動作とは、図11に見られるようにSAME(同じ)という手話

記号であり、これは解説するまでもない有契的表意である。

ASLの「血縁のある家族」を俯瞰すると、日本手話と同様の有契的表意の原基が日本手話以上に多彩に活用され、手型パラメーターを先導に全パラメーターが展開する。全パラメーターのいくつかは、「抱っこする」に表れるような明確な有契的表意を示すものもあれば、もはや恣意的象徴として継起的に造形する分担機能を果たすものもある。

3.2.2 「血縁のある家族」における DGS の造形

最後に DGS に視点を移動して、その際に、もう一度日米の手話を俎上に載せて対比させる。ASL を中間に置いて、日本手話と対極にあると見なされる DGS であるが、それにもかかわらず、有契的表意と恣意的象徴をめぐる通底する造形形態とは何であろうか。ここでは、「血縁のある家族」の 11 手話から 4 つのみ表示する。

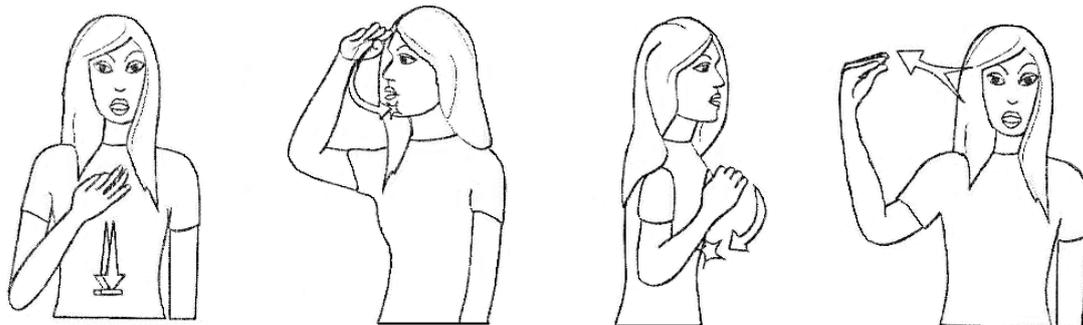


図 12 TOCHTER (娘) 図 13 VATER (父) 図 14 FRAU (女) 図 15 MANN (男)

日米手話における原基と手型パラメーターが DGS にも認められるであろうか。統一性は認められない。日米の「[男]・[女] MAN/ WOMAN」が「[父]・[母] FATHER/ MOTHER」の原基を成す有機的な連続性を有している一方で、DGS にはそれが無い。

DGS の MANN (図 15、男) と FRAU (図 14、女) の手話記号は有契的表意である。MANN は帽子をかぶる造形である。帽子は突拍子もない有契的表意体ではない。DGS と ASL は帽子が男女を表す原基となる。ASL における MALE/ FEMALE/ BOY/ GIRL、それを基本パラメーターにする SON/ DAUGHTER/ BROTHER/ SISTER は帽子をモチーフとする³²。日本手話に帽子の原基が見当たらないのも、ちょんまげと髪結い文化の日本と帽子文化の西洋の文化的相違がここには間違いなく存在するからであろう。もう一方の FRAU もまた劣らず女性を表す造形動作の発想が日本手話では考えにくい。タイプが 2 つあり、1 つはイヤリングを触るような造形動作、他方は胸のふくらみの造形動作である。前者のリング (輪) の原基も帽子同様に DGS や ASL に好まれる。結婚・婚約指輪を考えるといいだろう。もう一方の胸のふくらみの造形動作に関して、MÄDCHEN (結婚前の少女) は、胸を親指手型で掠る手指動作をする。これは、「足りない」という有契的表意の原基である。胸のふくらみが足りないことが、まだ Frau でない Mädchen を意味する。その手指動作が

実行場所のパラメーターを変えると、JUNG（若い）となる。これは、ドイツ人男性に多い口髭が足りないという表意の象徴である。

したがって DGS に不統一感はあるが、本論の主張に沿って、きちんと有契的表意の原基を有している。それは日米に通底していた「顔面への接触」が DGS にも認められるということである。図 13 の VATER（父）の額から顎の移動接触にとどまらず、MUTTER（母）も、左頬から右頬に移動接触する現象は、「血縁のある家族」の有契的表意を想像するに十分に説得的である。日米手話と変わるところなく、本来は血のつながりを表す有契的表意であるはずの顔面の接触動作は、ドイツの現代人には恣意的な造形的象徴とするしかないのである。ただし、父母の顔面接触する手型造形は他の手話語彙に見出しがたい。DGS が日米手話の統一感と齟齬をきたすのは、父・母以外の 9 個の手話造形である。ELTERN（両親）は後述するが、残る「息子・娘・兄・弟・姉・妹」はいかにも機械的である³³。

6 個がそれぞれにちぐはぐな造形であれば本論の主張が半ば無効になる危険に陥るが、決して無秩序を見せない。まず、SOHN（息子）と TOCHTER（娘）の手指動作が同じ³⁴である。それも、F 手型の利き手を胸付近から下げる味気ない造形である。F 手型の有契的表意は、音声言語のフランス語が、fils（息子）と fille（娘）の頭字 F から派生すると手話辞典に掲載されている。しかし、F 手型の出自が分かっているからといって、有契的表意性が説明されたわけではない。

兄・弟・姉・妹において、兄と弟が兄弟、姉と妹が姉妹になるのは周知のことなので、ASL 同様に 2 区分されることは許容できるとしても、DGS は再び 4 人の「血縁のある家族」を「1 つ」の手話記号で実現させる。つまり、BRUDER（兄弟）と SCHWESTER（姉妹）が同じ手話記号であり、その上 GLEICH（同じ）とも手話造形が文字通り同じなのである。確かに ASL の BROTHER/ SISTER もまた SAME（同じ）の手話を造形したが、それに先立つ第 1 手指動作があった。DGS の無造作な造形は、しかし、意外と原始的な単純さに還元されるように思われる。いにしへの家族共同体において、兄弟姉妹は、苦楽、富、そして親愛において等しく同じ個であり子であっただろう。むしろ、日本手話の兄弟姉妹が 4 つに細分化され、動きのパラメーターは、兄姉には指上げ、弟妹には指下げの階級差を設けることにおいて、音声言語の兄・弟・姉・妹の細分と辻褃が合う。また、日本手話では父・母の手指の実行場所パラメーターを顔付近に高め際立たせるのに対し、子の兄弟姉妹の実行パラメーターは胸付近と父・母より低い。これは、西洋的な階層感覚からではなく、日本的な年上と年下の長幼や敬老精神が日本手話に忠実に反映されたのであろう。この意味では、DGS が兄弟姉妹をひとまとめにして、GLEICH（同じ）と同一の造形をするのは、自由平等の博愛精神が手話に浸透したともいえるであろう。

DGS の原基の不統一が際立つのは、日米手話と相容れない血縁手話の ELTERN（親）である。日米手話は、「[両親] / PARENTS」を、[父]・[母] と FATHER/ MOTHER の原基から出発するため、実に論理的である。日本手話の「[両親]」は頬に接触する原基動作の後で、「男・女」、すなわち [父]・[母] を一体化する Y 手型を顔付近に定める。



図 16 親

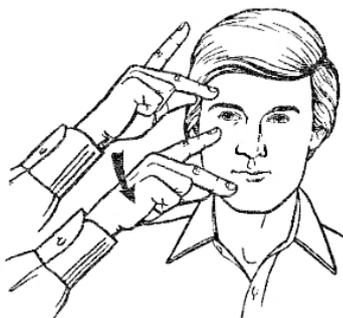


図 17 PARENTS

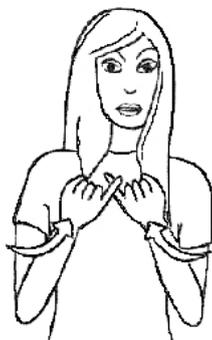
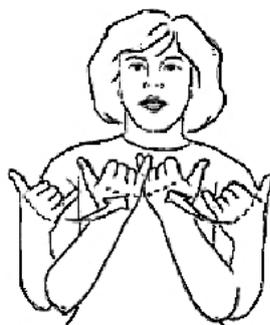


図 18 ELTERN (両親)

図 19 HEIRATEN³⁵ (結婚)

同じく、ASL も、MAN/WOMAN→FATHER/MOTHER のそれぞれの単一の原基を継起的に連結させて造形する。これぞ、原基を有契的表意にした複合手話³⁶である。一方で、DGS の ELTERN は、図 18 のように VATER と MUTTER のいかなるパラメーターとも同一でない別種の造形をする。これは単一の原基から出発する有契的表意に反しているのではないかと思われるが、そうではなく、ELTERN は別の有契的表意を示しているのである。ELTERN の原基を提供する手話記号はなんと図 19 の HEIRATEN (結婚) である。DGS が造形上、教えるところを解釈すれば、親なる人間は、結婚を通して一对の組になる社会的な存在であるとする。なぜならば、原基の HEIRATEN は、さも男女が一对となるのを動的にアピールすることにおいて、日本手話の「結婚」が穏当な静的手指動作であるのと対照的である。DGS の肉体的な有契的表意性は既に言及した。FRAU と MÄDCHEN である。胸のふくらみで表出する前者と、胸のふくらみがないことを示す后者の造形性は、日本の手話には発想が困難であろう。

古代エジプトの絵文字的なヒエログリフを出自としたシナイ文字の有契的表意性が、原初のアルファベット文字記号の恣意的象徴性(表音性)に記号化される過程は、考古学的な研究による考証により明らかになっている³⁷。一方、手話記号における、原初的な有契的表意性から今日的な恣意的象徴性への造形上の価値づけは、そこに原基が手型パラメーターと協働して基軸を成さねば、言語科学的に証明されない。この意味において、「血縁の

ある家族」の手話言語が、日本手話と ASL にあっては、[男]・[女] と MAN/ WOMAN の手型パラメーターと原基の基軸で一体的に支えられているのに対して、DGS では一体感が乏しい。その分、有契的表意性から恣意的象徴性への本論の主張の成立度は日米手話に比べ低いかもしれない。しかし、上述の動的で肉体的な造形に垣間見えるように、手話語彙のカテゴリーを変えると、そこに日米独間の逆転現象が生じることが分かる。その意味で日米独の手話のトライアングルの中に、有契的表意性と恣意的象徴性をめぐる手話言語上の本論の主張が確認できる。

3.2.3 「時間単位」における DGS

ここで DGS のカテゴリー「時間単位」を簡潔に紹介することで、DGS が日米手話の「時間単位」よりも優れて有契的表意性から恣意的象徴性へ抽象化される確かな手ごたえを明らかにできる。何度も確認したように、本論の主張が成り立つには、手話造形の中に原基と原基に継起する手型パラメーターないしは原基そのものの手型パラメーターが基軸を担わねばならない。カテゴリー「時間単位」で思いつく語彙は、「日・週・月・年・毎日・今日・明日・昨日」であるし、「いつも・すぐに」も時間性を含む。そして、これら一群を統括する概念が「時 (Zeit/ time)」である。

DGS において、図 20 から図 23 のすべての語彙の手話記号が、唯一の手型パラメーターにより造形される原基が共通となり、原基の上下、垂直、回転という手指動作が一体感を成すのである。つまり指先を上到手型方向した人差し指 (Zeigefinger) の手型パラメーターが原基である。これは「太陽」の有契的表意であると考えられる。物理的宇宙に存在する太陽 (Sonne) ではなく、「時の流れを司る太陽」という意味の比喩的表現である。物理的宇宙の太陽は、日独とも別の手話記号がある。

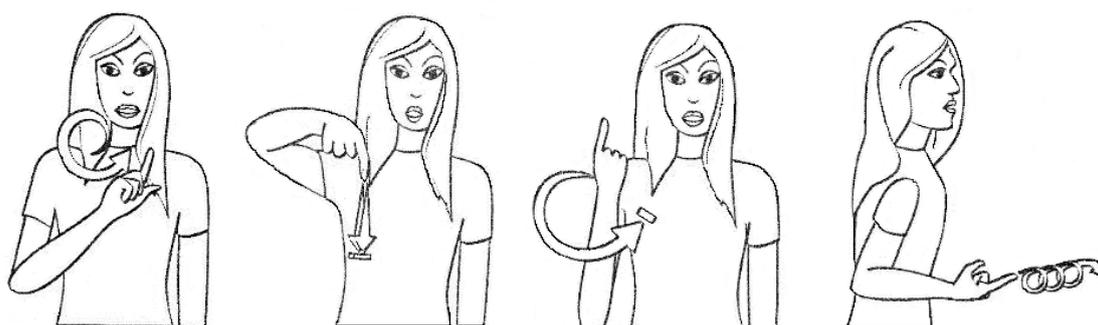


図 20 ZEIT (時) 図 21 HEUTE (今日) 図 22 JAHR (一年) 図 23 IMMER (いつも)

日本手話にその相関を見出すと、[毎日]・[西]・[東]・[ゆっくり]等の日本手話は、「時の流れを司る太陽」の手型パラメーター「ム」を原基とする。例えば、[毎日]はム手型の両手が回転する。これは、「時の流れを司る太陽」の反復運動である。図 24 の[西]はム手型の両手が下向きのパラメーターで降下する。「時の流れを司る太陽」が西に沈むイメー

ジである。図 25 の [ゆっくり] は、ム手型の太陽が胸付近でゆったりと左 (東) から右 (西) へ弧を描く。

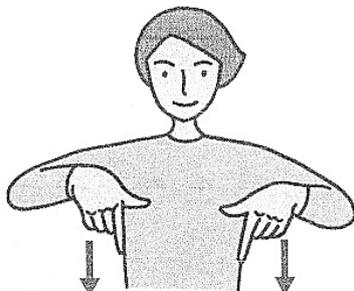


図 24 [西]

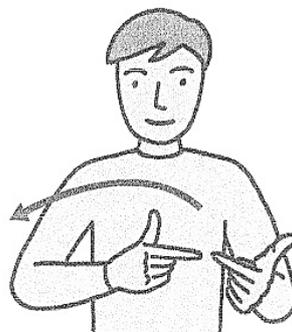


図 25 [ゆっくり]

DGS は日本手話よりもはるかに広範囲に時間単位の手話記号を人差し指の手型一本で描く。その手指動作は、日本手話と合致する。TAG (一日) は手型の太陽が一度だけ降下する。図 22 の JAHR (一年) は手型の太陽が大きくゆったり 1 回転する。図 23 の IMMER (いつも) は手型の太陽が何度も螺旋回転する。そして、図 20 の ZEIT (時) は、手型の太陽が胸の前で小回転する。原基の手型パラメーターが「時の流れを司る太陽」を有契的に表意する。指先を上を指した「太陽」は、原初より天上に君臨する太陽を指差すのではあるまいか。MORGEN (明日) と GESTERN (昨日) も Zeigefinger 手型によってなされ、日本手話のそれとほぼ同じ造形である。したがって、日本手話の [明日]・[昨日] が数字の「1」を兼ねる人差し指手型「ヒ」(図 29) であれば、DGS のそれもまた、筆者の仮定する「太陽」ではなく「1」ではないかとの異論が予想される。しかし、DGS の数字「1」は親指手型 (DGS では A 手型 (図 27)) である。これが MORGEN / GESTERN は「1」とは本来、無関係であることを証している。一方、聾者に「今日の一日後」だから「1」を意味する A 手型で MORGEN (図 26) を造形する人がいる。また、ÜBERMORGEN (明後日) と VORGESTERN (一昨日) では日本手話の「2」を表す人差し指と中指を立てる V 手型で造形する。推察するに、手話が非保存媒体の時代、聾共同体は、2 日後や 2 日前は生活に必要ななかった、昨日と今日と明日があればコミュニケーションとして十分であり得た。しかし、コミュニケーションが成熟していくにつれ「2 日後」や「2 日前」という語彙が必要になる。かくして、数字の「2」が追加される。その際の記号は、有契的表意の原基を意識せずに幾何学的に構築されるのであり、MORGEN を「1」の親指手型で造形する背景は、今日の DGS に限らず、手話一般が有契的な原基よりも機能的な手型にゆだねがちであることによる。



図26 MORGEN (明日)



図27 A手型



図28 [明日]



図29 ヒ手型

「血縁のある家族」の手話において日米の原基と手型パラメーターの基軸に確固とした論理性を打ち出せなかったDGSは、しかし、「時間単位」の手話においては確固たる原基を示す。カテゴリーに応じて、日独米の手話はそれぞれ有契的表意の原基を有していることが分かる。かくして、有契的表意のシナイ文字が原初アルファベットへの恣意的な表音文字へ抽象化されるのに平行して、日独米の手話言語もまた、その抽象化に沿うように造形する記号体系を確立しているのである。

4. おわりに

人類の言語生成の歴史に関し、本論では、文字言語であっても手話言語であっても同じ経路を歩んできたのではないかという仮説にしたがって展開してきた。原始時代のピクトグラムや絵文字の流れをくむシナイ文字は、有契的表意性と恣意的表音性が混在したものであったといえる。一方、日独米の手話も同様に有契的表意性と恣意的象徴性を有していると実証された。

第1節において、古代の原始文字はデータ保存が可能なコミュニケーション媒体であると述べた。データ保存された情報ソースは、解読できる規範があった。その規範ルールが簡単なもの、自然なものであればあるほど、多くの人々に容易に伝達できる。例えば、「蛇」のピクトグラムは生物の「ヘビ」であることを誰しも解読できる。その意味で手話もまたデータ保存可能な解読規範を有している造形的見本があるように思われる。例えば、日本手話の「立つ」は、DGSやASLの「立つ³⁸」とほぼ同じである。これは人間の立つ行為が時代や地域、さらに文化・慣習の相違を乗り越えて人類が普遍的な象徴記号として受け入れることができたからである。太古も中世も近代も「立つ」はほぼ一定の手指の造形動作をしたであろう。

しかし、絵文字の「蛇」や手話の「立つ」が普遍的に有契的な象徴記号であることは肯けるとしても、象徴記号のどれもが、普遍的に受け入れ可能な有契の形姿を持っているわけではない。絵文字の言語記号においては、時代と場所の推移や様態の変遷を経て、絵の象徴度と意味の表出度の乖離が増す。遂には、自然な絵的な即物性から抽象的な象徴性へ

移行して、それがいつしか時代、その文化圏の中で慣習化されてしまい、現在に至る異質な環境世界では、絵文字記号の表意的な解読は困難となるであろう。

手話の場合は、追従を許さないほどに解読作業が難しい。なにしろ手話はデータ保存可能な媒体でないし、印刷技術の発展などの文明の利器により、イラストレーションとして保存されるのはせいぜい 19 世紀に過ぎない。その時点までの原初に土着した手話記号体が聾共同体に存在したはずである。聾者は原初の時代から、病理学的確率（聾の因子とされる猩紅熱等）と同族婚の根強い社会の中で、現在以上の割合で存在した。したがって、いわゆる語源的な考察に決定的な証しとなる保存データがない現実にあっては、本論の主張の試みは、手話言語学の未開拓な領域であろう。

かつては有契的なモチーフによる、ある特定のものを表意した事物 (Substanz) が、時代の流れの中で、徐々にモチーフがはがれて、ついには半分ほどしか有契的表意がうかがわれないもの、あるいは完全に有契性が流れ落ちて、恣意的象徴の外見しか想像できなくなるほど捨象されたものなどさまざまなレベルと向き合うことで、我々の時代感覚が過去と折り合いをつけることの難しさを痛感する。しかしながら、人間の文字言語や手話言語を有契的表意性（絵姿的造形性）と恣意的表音性（アルファベット記号体系性）、あるいは恣意的象徴性の規範で把握する試みによって、歴史的・慣習的な捨象と残像の相通うプロセスを実感的に認めることができる。

注

1. 朝日新聞 36 面、朝刊。
2. 竹内・ダーネル (2008: 30-31) を参照。
3. Gelb (1974: 62) を参照。
4. 竹内・ダーネル (2008: 20) を参照。
5. ロビンソン (2006: 196) を参照。
6. ヒーリー (1996: 22) を参照。
7. ナヴェー (2000: 28) を参照。
8. 世界の文字研究会 (1993: 71) に掲載されている図を借用し、一部編集を加えた。
9. 牛耕式は、犁耕体とも呼ばれる。ナヴェー (2000: 51) を参照。
10. 本図はナヴェー (2000: 29) から借用した。
11. カルヴェ『文字の世界史』の 118 頁によると、「lamd は伝統的には「針」と解釈されているが、この字源は不詳である。」とされている。本稿では、シナイ文字の写像性の高さを考慮に入れ、「針」という解釈よりもナヴェーの『初期アルファベットの歴史』29 頁で使用されている「(家畜を追う) 突き棒」を採用した。
12. bêt とは Bethlehem (=Bayitlachmu) のこと。
13. ヒーリー (1996: 29) を参照。
14. マン (2004: 145) を参照。
15. カルヴェ (1998: 119) を参照。

16. 手話が「言語」として認識される歴史的過程については Stokoe (2001: 52-58) を参照。
17. Becker (1997: 7) 及び Liddell (2003: 4) を参照。
18. Stokoe (1960) は “Sign Language Structure: an outline of the visual communication systems of the American deaf.” の冒頭で以下のように述べている。

“The primary purpose of this paper is to bring within the purview of linguistics a virtually unknown language, the sign language of the American deaf. Rigorous linguistic methodology applied to this language system of visual symbols has led to conclusions about its structure which add to the sum of linguistic knowledge. (Stokoe 1960: 7)”

手話を初めて言語学的に分析した Stokoe (1960) 以降、手話は音声言語と同等の言語であり、言語研究の対象として認識されるようになった。手話言語は、音声言語とは異なる独自の文法体系を持つ一方で、音声言語を対象とした研究成果から構築された音韻論、形態論、統語論、意味論等の枠組みを用いて分析することが可能であるという見解が広がってきた。Baker and Cokely (1980) や神田 (1994) を参照。

19. <http://www.welt.de/politik/wahl/bundestagswahl/article120162408/Warum-Peer-Steinbrueck-kein-Vollblutpolitiker-ist.html> (2014年02月19日閲覧)
20. 造形はドイツ手話言語学で *bildhaftig* と表記される。
21. 日本手話に関する文法については、米川 (1984) に体系的に記述されている。
22. Bellugi and Klima (1975) を参照。
23. 日本手話の単語表記は [] の括弧を使用する。
24. 日本手話のイラストは文献にリストアップした緒方 (2005)、アメリカ手話は Butterworth and Flodin (1995)、ドイツ手話は Strixner und Wolf (2004) 著作の3冊の辞典から借用した。ただし、ドイツ手話は、別の辞典から借用したイラストが1つあるので、その場合は脚注で新たに指摘する。
25. 「子」は外される。「子」は血縁の関係から造形されずに、まだ成長していない小さな存在として、成長した「大人」の対比概念として真逆に造形される。実行場所のパラメーターは、「大人」の頭部と対照的に腹部に定められる。日独米の手話はどれも似た造形をする。
26. DGS は *Deutsche Gebärdensprache* の略称であり、ASL は *American Sign Language* の略称である。
27. しかし、言語の不規則性は手話にも当然存在し、[兄]・[弟] の場合には「男」であるにもかかわらず、中指の手型で造形動作する。
28. Becker (1997: 8) を参照。
29. 記しておかなければならないのが、1つの意味の手話語彙に対して、複数の造形記号があるということである。これに翻弄されると、本論の主張の非本質的な混乱材料に

なるので、複数の手話造形の場合は、図は任意の1つで代表させる。考察には複数の造形記号が考量される。

30. 米における手話単語の表記 (notation) は、国際的な手話言語学の規範から大文字表記される。神田 (1994: 2) を参照。
31. なお、音声言語と同じく、西洋諸言語に見られる兄弟と姉妹の長幼の区別はない。兄と弟は同じ手話記号であり、姉と妹も然りである。
32. 英語の Movement-Hold の概念で表される手話動作の一大特色を「継起」(ドイツ語で Abfolge) という。Liddell (1984) の the Movement-Hold model 及び Liddell (2003: 12) を参照。
33. GIRL の造形から、帽子の概念には婦人の bonnet の結び紐も含まれると考えられる。Klima and Bellugi (1979: 24) を参照。
34. 「祖父母」の手話は、日独米とも等しく、「父・母」を原基としてプラスアルファの造形動作が継起する。
35. ただし、F 手型の手の降下動作が Sohn は 1 回、Tochter は 2 回行う聾者がいる。
36. このイラストだけが、参考文献にある Beecken et al. (1999) からの借用である。
37. 複合手話とは 2 つ (以上) の単一手話語彙を加算的に継起させることをいう。日本手話の例では、[病院] は、[脈をとる] + [建物] となる。この意味で、日本手話の [親] は父・母を融合した Y 手型で造形するので複合手話とはいえないが、ASL は MOTHER+ FATHER の複合手話である。中野 (1981: 23) 及び Klima and Bellugi (1979: 202) を参照。
38. プリュールゴープト (2007: 46) を参照。
39. 「立つ」という手話は、右の人指し指と中指を伸ばして下に向け、左手に指先をのせる。

参考文献

- Baker, Charlotte S, and Dennis Cokely. 1980. *American Sign Language: A Teacher's Resource Text on Grammar and Culture*. Silver Spring, Md: T. J. Publishers.
- Becker, Claudia. 1997. *Zur Struktur der Deutschen Gebärdensprache*. Trier: WVT Wissenschaftlicher Verlag.
- Bellugi, Ursula, and Edward S. Klima. 1975. Aspects of Sign Language and its Structure. In Kavanagh, James F, and James E. Cutting (eds.), *The Role of Speech in Language*, 171-203. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Calvet, Louis J. 1996. *Histoire de l'écriture*. Paris: Plon. (会津洋他 (訳) 『文字の世界史』 東京: 河出書房新社, 1998)
- Gelb, Ignace. 1974. *A Study of Writing*. Chicago/London: The University of Chicago Press.
- Healey, John F. 1990. *The Early Alphabet (Reading the Past)*. London: British Museum Press. (竹内茂夫 (訳) 『初期アルファベット』 東京: 学藝書林, 1996)

- 神田和幸. 1994. 『手話学講義』 東京: 福村出版.
- Klima, Edward S, and Ursula Bellugi. 1979. *The Signs of Language*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Liddell, Scott K. 1984. THINK and BELIEVE: Sequentiality in American Sign Language Sings. *Language* 60(2): 372-399.
- Liddell, Scott K. 2003. *Grammar, Gesture, and Meaning in American Sign Language*. New York: Cambridge University Press.
- Liddell, Scott K, and Robert E. Johnson. 1989. American Sign Language: The Phonological Base. *Sign Language Studies* 64: 197-277.
- Man, John. 2000. *Alpha Beta-How our Alphabet Shaped the Western World*. London: Headline Book Publishing. (金原瑞人他 (訳) 『人類最高の発明 アルファベット』 東京: 晶文社, 2004)
- 松本晶行. 2001. 『実感的手話文法試論』 東京: 全日本ろうあ連盟出版局.
- 中野善達. 1981. 『手話の考察』 東京: 福村出版.
- Naveh, Joseph. 1987. *Early History of the Alphabet: An Introduction to West Semitic Epigraphy and Palaeography*. Jerusalem/Leiden: The Magnes Press. (津村俊夫他 (訳) 『初期アルファベットの歴史』 東京: 法政大学出版局, 2000)
- 岡典栄. 2012. 「日本手話: 書きことばを持たない少数言語の近代」 一橋大学 博士論文.
- Pflughaupt, Laurent. 2003. *Lettres Latines*. Paris: Les Editions Alternatives. (南篠郁子 (訳) 『アルファベットの事典』 大阪: 創元社, 2007)
- Prillwitz, Siegmund, und Regina Leven. 1985. *Skizzen zu einer Grammatik der Deutschen Gebärden-sprache*. Hamburg: Forschungsstelle Deutsche Gebärdensprache.
- Robinson, Andrew. 1995. *The Story of Writing*. London: Thames & Hudson Ltd. (片山陽子 (訳) 『文字の起源と歴史 ヒエログリフ、アルファベット、漢字』 大阪: 創元社, 2006)
- 斉藤くるみ. 2007. 『少数言語としての手話』 東京: 東京大学出版会.
- 斉藤道雄. 1999. 『もうひとつの手話 ろう者の豊かな世界』 東京: 晶文社.
- Stokoe, William C. 1960. Sign Language Structure: an Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf. *Studies in Linguistics, Occasional Papers* 8: 3-37. New York: University of Buffalo.
- Stokoe, William C. 2001. *Language in Hand: Why Sign Came Before Speech*. Washington: Gallaudet University Press.
- 高田英一. 2013. 『手話からみた言語の起源』 京都: 文理閣.
- 竹内茂夫・ジョン ダーネル. 2008. 「アルファベットのルーツ」 『Newton』 5: 16-55.
- 田上隆司・森明子・立野美奈子. 1981. 『手話の世界』 東京: 日本放送出版協会.
- 米川明彦. 1984. 『手話言語の記述的研究』 東京: 明治書院.

辞書

Beecken, Anne, Jörg Keller, Siegmund Prillwitz, und Heiko Zienert. 1999. *Grundkurs Deutsche Gebärdensprache, Stufe 1 Arbeitsbuch*. Hamburg: Signum Verlag.

Butterworth, Rod R, and Mickey Flodin. 1995. *The Perigee Visual Dictionary of Signing*. New York: Perigee Trade.

緒方英秋. 2005. 『すぐに使える手話辞典 6000』 東京: ナツメ社.

世界の文字研究会 (編) 1993. 『世界の文字の辞典』 東京: 吉川弘文館.

Strixner, Stefan, und Serona, Wolf. 2004. *Kleines Wörterbuch der Gebärdensprache*. Wiesbaden: Marixverlag.

竹村茂. 1999. 『手話・日本語大辞典』 東京: 廣濟堂出版.

**Effects of pictoriality on the motivated and arbitrary properties of language:
Sinaitic script and sign language**

Akiko Tominaga

This paper aims to clarify the motivated and arbitrary properties of language from the perspective of pictoriality, based on observations of Sinaitic script and sign language. Sinaitic script, which is a written language and has its roots in hieroglyphs, was a primitive form of arbitrary phonogramic code that later became the Roman alphabet. Sign language serves as communication medium for the deaf and is affected by social conventions and culture to some extent. As with Sinaitic script, sign language is an arbitrary code in which sign vocabulary is symbolically pictorialized by four “parameters” (hand shape, palm orientation, location, and movement) corresponding to morphemes in spoken languages, though it is assumed that sign language preserves ideographic elements. Sinaitic script and sign language have the linguistic properties of pictoriality and expression through pictorial images in common. To be precise, they share the motivated pictoriality. In the process of their development, however, the motivated features of pictoriality got weakened as these two languages gradually lost the connection between pictorial images and those which they denote or the resemblance between the signed and the signified. Sinaitic script and sign language become therefore recognized as encoding arbitrariness at present. To explore the pictorial perspective on the motivated or arbitrary properties, this paper introduces and compares Japanese, German, and American sign languages, which seem to differ in manual sign-forms. It is shown that these different sign languages have certain correlations between motivated and arbitrary signs in common.